

日本中國學會報 第七十四集  
二〇二二年十月八日 發行 拔刷

# 中世五山禪林における朱子學の受容

——桃源瑞仙の『史記抄』を中心に——

陳

路

# 中世五山禪林における朱子學の受容

——桃源瑞仙の『史記抄』を中心に

一六二

陳 路

はじめに

桃源瑞仙（一四三〇～一四八九）は室町中期の臨濟宗の僧である。桃源は道號、瑞仙が法諱で、別に竹庵、蕉雨、蕉了とも號した。當時の五山禪林の講抄活動において名を成した一人で、『百衲襖』『史記抄』『三體詩抄』『蕉雨餘滴』など數多くの抄物・著作が傳わる。その代表作『史記抄』は桃源みずからの講義を門人の季玉承球とともに整理したもので、中世の口語だけでなく、中世日本の史學や叢林の學風を反映する貴重な史料として全文の翻刻、版本の複製がなされ、研究者たちの關心を集めてきた。本抄に關する研究は、國語學をはじめ、文學、史學、醫學などの分野にまで波及している。

しかし、桃源が『史記』を講抄する際、史書や詩文、醫書を参照したことは知られているが、經書や朱子學（宋學）の内容を大いに引用していることはこれまであまり注目されていない。足利衍述『鎌倉室町時代之儒教』では桃源による『易經』の抄物『百衲襖』を取り上げてその儒學を論じているが、『史記抄』についてはほとんど觸れていない。蔭木英雄は、桃源は經史學を用いて『史記』の本文を注釋して

いると指摘したが、詳しい論述はなされていない。また今泉淑夫の『桃源瑞仙年譜』は從來の研究をふまえて『史記抄』は『史記』『漢書』二つの閉鎖的な學統を統合したとして、その畫期的な意味を論じたものの、儒學、特に朱子學についてはほとんど言及していない。

このように『史記抄』の中の儒學・朱子學の内容はこれまでほとんど注意されていないが、本抄は中世の叢林または漢學界全體における朱子學の受容や儒學の研究状況の一部を把握するための貴重な資料と思われる。そこで本稿では『史記抄』中の朱子學關連の記述を検出し、その意味を考察したい。

なお、本稿では『史記抄』の本文は龜井孝・水澤利忠『史記桃源抄の研究』本文篇全五冊（日本學術振興會、一九六七年）を用い、引用のあとの括弧にその冊數とページ數を入れることにする。なお、句讀點については適宜改めた所がある。

## 一 『史記抄』中の朱子學關連の内容

桃源の『史記抄』は從來、室町時代の口語や史學を考察する貴重な資料として利用されてきたが、そこには朱子學關連の記述内容が多數

検出できる。まず、それらを概略列挙してみよう。

### 1 朱子學関連注釋書引用の概略

たとえば「吳太伯世家」の巻頭に、

周易ト毛詩ト左傳トヲハ、朱晦庵親註之、尙書命蔡沈爲之傳、禮記命陳澹爲之集說、周禮ハ可行于今世乎ト云テ、イロワレヌソ。

(本文篇二、三九三頁)

とあつて、『周易』『毛詩』『左傳』の朱熹注と蔡沈の『書集傳』、陳澹『禮記集說』に觸れている。さらに「儒林列傳」の末尾では、

宋朝ニ至テ、周茂叔二程先生以下、晦庵ニ及テ、繼絕世性學、明漢唐諸儒未發之妙、集而大成也、於是朱夫子採先儒之注解。易ニハ、本義啓蒙ノ二書アリ。詩ニハ集傳アリ。春秋ニ集注アリ。尙書ハ、弟子蔡沈カ多述舊聞集傳ヲ作ルソ。本受先生之命、述スルナリ。二典禹謨ハ、先生蓋嘗正手澤尙新ト云ソ。禮記ハ陳澹カ作集說ソ。陳澹カ先君ハ、師事雙峰先生十有四年、所得於師門講論甚多、中罹煨燼隻字不肖孤僭不自量會萃衍釋、而附以臆見之言、名禮記集說トシタソ。周禮ハ未詳、可考ソ。其後又諸儒注解ヲ集テ、六經ニ各大全ト云カ出タソ。又文公特抽禮記中之大學中庸之二篇、加以論孟、四書ト云テ、大學論語中庸孟子次第シテ、四書ノ集注ヲ作ルソ。後ニ倪子毅カ輯釋、王元善カ通考、程復心カ章圖ナント、云カ、テキタソ。近又四書大全ト云モアルソ。不可枚舉矣。(本文篇四、四七八〜四七九頁)

と、朱熹(一一三〇〜一二〇〇)を中心に宋元明の朱子學者たちの經書注釋活動をかなり詳しく紹介している。

「周茂叔二程先生」は理學の開創者周敦頤(一〇一七〜一〇七三)、程顥(一〇三二〜一〇八五)、程頤(一一〇三〜一一〇七)である。蔡沈(一

一六七〜一二三〇)は朱熹の講友蔡元定(一一三五〜一一九八)の子であり、朱熹の作業を繼承して『書集傳』を完成させた。陳澹(一二六〇〜一三四二)は元の儒者であり、その父陳大猷(一一八八〜一二七五)が師事したという「雙峰先生」は宋の儒者饒魯(一一九三〜一二六四)である。饒魯は李燔(一一五六〜一二三五)および黃榦(一二五二〜一二二二)のもとで學び、朱熹が再建した白鹿洞書院を運営した經歷もある。李燔と黃榦は朱熹の門人であり、特に黃榦は朱熹の女婿としても知られる。すなわち陳澹は朱熹の四傳の弟子ということになる。このほか、倪士毅(一二三〇〜一三四八)の『四書輯釋』、王元善の『四書通考』、程復心(一二五七〜一三四〇)『四書章圖纂釋』、さらに明初の『五經大全』(六經ニ各大全ト云カ出タソ)というのには『五經大全』のことであろう、『四書大全』にまで言及している。

本抄では朱子學関連の著書を紹介するほか、實際に朱熹自身の著作をしばしば引用する。以下に見るように、朱熹の『論語集注』『孟子集注』『論語或問』『孟子或問』『朱子語類』『資治通鑑綱目』『詩集傳』『易學啓蒙』『家禮』などの記述が引かれ、さらには『四書大全』『五經大全』など朱子學の多くの著作が利用されている。

### 2 『通鑑綱目』(資治通鑑綱目)

桃源は『史記』本文を注釋する際、『資治通鑑』『左傳』『前漢書』『史記三家注』などの史書をよく利用しており、『通鑑綱目』関連の引用も三ヶ所ある。

まず「秦始皇本紀」の冒頭に、

通鑑ハ溫公カ著タヲ、朱文公ニ至テ綱目トテ、其ノ事ヲ題目ノ様ニ出テ、其下ニ注ノ様ニ兩行ニ通鑑ノ文ヲ載テ、綱目ヲハ、夫子ノ春秋褒貶ニ象ソ。其次ヲハ、左傳ナントニ象ソ。溫公カ製作ノ

チカウタト思フ處ヲハ政(他本「改」)タソ。三國ヲ温公ハ魏ヲ正統トメ、蜀吳ヲハ列國ノ様ニシタヲ、文公ハ改テ、蜀ヲ正統ニメ、魏吳ヲハ附見シタリ。則天ノ年號ヲハ、分注ニメ、中宗ノ初ノ年號ヲ上ニ大字ニ書シタリナントシタソ。(本文篇一、三四三頁)と見える。ここでは朱熹が司馬光の『資治通鑑』をふまえて『通鑑綱目』を作成したことや、正統論の觀點から三國の魏と蜀、則天武后時代の年號について論じている。

さらに「項羽本紀」「乃陰令衡山臨江王擊殺之江中」條では、

朱子綱目、掲而書之、……密擊江中、果可以欺天下乎。(本文篇二、四二頁)

と注している。これは『通鑑綱目』卷二の原文をそのまま引用して、項羽の不義を批判したものである。

本抄の中に引用される『通鑑綱目』の記述は多くないが、それぞれ正統論、大義名分とかわかる内容であり、いずれも中國の儒者にとつては極めて重大な議論である。

桃源はなぜこれらの記述を引用したのかは、もちろん彼自身の問題關心がかかわっているであろう。

正統論についていえば、王朝の更迭が頻繁に行われた中國と比べて、日本の皇統は極めて安定し、正統論に關する議論はもともと少ない。しかし、十四世紀前期から、兩統迭立を背景に、花園天皇(一二九七〜一三四八)の『誠太子書』(『花園天皇宸記』元徳二年(一二三〇))や『神皇正統記』(康永二年(一一三三))など正統論に關する著述が現れた。また、桃源の時代には壬生官務家の壬生晴富(一四二二〜一四九七)が『神皇正統記』を批判するために『續神皇正統記』という史論書を著述している。本抄「吳太伯世家」の奥書に見える壬生官務雅久

は晴富の嫡男壬生雅久(一一五〇四)である。このように、桃源は南北朝時代における皇統の議論を承けて正統論に關心を持つことになったのである。

大義名分に關する記述は、桃源の經歷とかわかると考えられる。桃源が『史記』を講抄した時期は文明八年(一二四五)から文明十二年(一二七九)までの五年間で、ちょうど應仁の亂(應仁元年(一二四六)〜文明九年(一二七六))の末期に當たっている。戰亂の影響で京都を離れ近江に避難した桃源にとつて、大義名分論は正統論と違つてある程度現實感があつたであろう。『太平記』『梅松論』などの軍記物語の影響により、大義名分の觀念がすでに日本社會に廣がつていたことも背景として考えられる。桃源はここで朱熹の大義名分に關する記述を引用するほか、「高祖本紀」の識語では「而細川公戴天子挾相公、以令諸侯。山名則無所適從。故我爲官軍、彼爲賊虜」(本文篇二、一六八頁)と、大義名分を用いて應仁の亂を論じた箇所もある。

### 3 『詩集傳』

本抄によく引用されるのは經書の注釋書である。まず『詩經』の注釋書『詩集傳』に關しては、「秦本紀」の「是以知秦不能復東征也」條に、

此毛臆見ハカリナラハ、イカヽナレトモ、詩ノ集傳ニ、春秋傳ヲ引テ、君子是以知一ト云次ニ、晦庵カ、愚按ト云テ、穆公於是其罪不可逃矣。但或以爲穆公遺命如此、而三子自殺以從、則三子亦不得爲無罪、今觀臨穴惴慄之言、則是康公從父之亂命、迫而納之於壙、其罪有所歸矣ト云ヲ以テ、御覽セヨ。サキニ愚カ云タル義ト符合ハセル歟。董氏曰、陳乾昔子魏顛皆從其治命、……陳少南曰、穆公悔過自誓見於秦誓、……是不孝也。(本文篇一、三〇三

と注し、朱熹の『詩集傳』秦風・黃鳥篇の一部を引用して秦穆公・康公親子の惡政を批判している。また、あとの方で「董氏曰」「陳少南曰」と記しているのを見ると、この部分は『五經大全』からの引用と考えられる。また「太史公自序」の「自黃帝始」の注にも、

詩序之作ハ、說者不同ソ。或以爲孔子、或以爲子夏、或以爲國史、後漢書儒林列傳ニハ、以爲衛宏作毛詩序、朱文公ハ、宏力作ニ定タソ。(本文篇五、三九四頁)

とある。ここでは、詩序が後漢・衛宏の作であるとする『詩集傳』の「詩序辨說」を引用している。當時の五山學僧の中には『詩經』に心を寄せて抄物を作る學僧は極めて少なく、柳田征司の調査によると景徐周麟ぐらいしかいない<sup>⑩</sup>。本抄で『詩經』の引用が多く、また『詩集傳』まで引用するのは、この時期の五山學僧が『詩經』に關心を寄せ、『詩經』を學ぶ際に『詩集傳』を利用し始めたことを示している。

#### 4 『家禮』

本抄が引用する文獻は經書やその注、史書に限らない。他に朱熹の『家禮』を引用していることも注目され、「孝文本紀」「已下服大紅十五日小紅十四日織七日釋服」條に、

喪禮ノ事ハ禮記ニ多ソ。文公喪禮トニ撰メ置タソ。一節一節ヲ、分タカ、二十節アルソ。其第五ニ、成服ト云ニ、厥明ニ、五服之、人各服其服、入就位、然後朝哭相弔如儀、其服之制、一日斬衰三年、二日齊衰三年、杖、期、不杖、期、五月、三月、三日大功九月、四日小功五月、五日緦麻三月、カウ定タソ。斬衰ト云ハ、三年ノ服ナリ。……以上ハ、朱文公喪禮ノ中ノ成服ノ一節ナリ。……文公ノ喪禮ニハ、親族ノ名トモカクワシウアリテ、重寶

とある。これは、『家禮』「喪禮」部分のうち「成服」章の正文と朱熹自注をそのまま引用したものである<sup>⑪</sup>。吾妻重二は永正三年(一五〇六)足利學校の寄進記録により、室町中期には『家禮』が日本に傳わっていたと推定するが、本抄の記述は日本における『家禮』本文の引用として、現在のところ最も早い記録ではないかと思われる<sup>⑫</sup>。ただし、この時期、『家禮』に關する他の記録はほとんど見當たらぬ。ここで桃源は「喪禮」の記述を引用したあと、さらに「禮記ヲ習フ者モ、禮記ニ此喪禮力不入ト云テ、凶卷ヲハ拔テ不聞様ナ者カアルソ。日本ニ不行レハコソ、猶能ク習テカ、ル禮モアリト可知ケレン」(本文篇二、二七一頁)と、當時『禮記』を學ぶ日本人は喪禮關連の記述を忌み嫌つて讀まないが、逆に、日本で行なわれていないからこそ喪禮の内容を知るべきだと述べている。これは當時『家禮』に無關心な世情の中で、同書に關心を寄せた特色ある事例として注意すべきであろう。

#### 5 『論語集注』など

本抄の中で最も頻繁に引用される朱子學關係著作は『論語』關連の注釋・解説書と『朱子語類』である。たとえば「貨殖列傳」の「則桓公以霸」條注では、

集注ニ、按春秋傳、齊襄公無道、鮑叔牙奉公子小白、奔莒。通證ニ、左傳僖公二十六年、齊孝公伐我北鄙、公使展喜犒師。……輯釋ニ或問、九之爲紕、展喜之詞、而糾合宗族之類、亦其證也。……通證唐書王珪傳、建成爲皇太子、授中書舍人、遷中允、禮遇甚厚。……愚謂、管仲有功、而無罪、故聖人獨特稱其功、王魏先有罪、而後有功、(細注 補太宗致太平) 則不以相掩可也。(本文篇五、二七九〜二八三頁)

と、『論語集注』憲問篇の記述を引用している。この部分には『集注』本文の記述のほか『四書大全』からの引用も多数見られるため、桃源は『集注』のほか『四書大全』も利用していたことが確認できる。ただ『輯釋』や『通證』などの書名そのものは『四書大全』には見えないところから、元の倪士毅『四書輯釋』と張存中『四書通證』をそれとは別に参照していたことになる。「輯釋二或問」云々というの『四書輯釋』に引く朱熹の『論語或問』を引用していることになるが、そのような引用の仕方を『四書大全』はしていないのである。

また「吳太伯世家」の「文身斷髮」條に、  
 論語泰伯第八篇二、王侃疏曰、泰伯者周太王長子、能推位讓國者也。……鬲云、此篇論禮讓仁孝之德。……范寧云、……王肅曰、泰伯周大王之太子也。……四書集成曰、泰伯周太王之長子、至德、謂德之至極無以復加者也。……語錄、問夫子稱太伯以至德、稱文王亦曰至德、稱武王則曰、未盡善。……集注謂泰伯之心、即夷齊之心……。或問、何以言三讓之爲固讓也。……張氏註、三讓、程子曰、不立、一也、逃之、二也、文身、三也。(本文篇二、四〇三〜四〇八頁)

とある。この部分はまず古注を引用する。初めに引用される「王侃」は皇侃(四八八〜五四五)のことであり、以下、「鬲云」の一文以外はみな皇侃『論語義疏』に見出すことができる。「鬲云」の「鬲」は宋の邢昺(九三二〜一〇一〇)のことで、『論語正義』からの引用である。そのあと「四書集成」などの書が次々と引用される。「四書集成」については、朱熹門人の劉燾と南宋の儒者吳真子にそれぞれ『四書集成』なる著作があつたらしいが、ここの記述は『論語集注』泰伯篇中の注釋文とほとんど一致している。よつて、ここの「四書集成」

は「四書集注」の誤記の可能性が高い。續いて『朱子語類』、『論語或問』も用いている。「張氏註」部分の記述は『四書大全』には見當たらず、張栻(一一三三〜一一八〇)『癸巳論語解』にあるので、『癸巳論語解』からの引用と考えられる。

『論語』は『易經』とともに當時の五山禪林において廣く讀まれた經書であり、希頊周頤講の『論語講義筆記』、彭叔守仙(一五五五)抄録の『論語鈔』などの抄物も残っている。桃源が『論語』を利用して『史記』の本文を注釋したのは當時の禪林學風の反映と考えられるが、ここに注目したいのは本抄に引用された『論語』關連記述は何晏らの古注よりも朱熹の新注の方が壓倒的に多いということであり、この點については清原家との關係が考えられるので、後章で詳しく分析したい。

## 6 『易學啓蒙』

五山禪僧の間で『論語』と同じく人氣を博した經書『易經』に関しては、「龜策列傳」の「八卦」條の注に、

先天八卦ハ、合洛書數圖、後天八卦ハ、合河圖數圖ト云カ、啓蒙ノ始ニアルソ。(本文篇五、二二三頁)

とある。これは『易學啓蒙』の冒頭部分を紹介したものである。本抄における『易學啓蒙』の引用は少ないが、一方、桃源の『易經』の抄物『百衲襖』の原典の一つは胡方平(一二八九)『易學啓蒙通釋』であつたことが注意される。

## 7 『孟子集注』など

「太史公自序」の「自周公卒五百歲而有孔子卒後至於今五百歲」條には、

集注曰、自堯舜至湯、自湯至文武、皆五百餘年、而聖出。……有

并行而不悖者、于此見矣。(或問文中子曰、聖人有憂乎、曰天下皆憂、吾獨得不憂、又曰樂天知命、吾何憂若孟子不忘天下之憂……則竝行而不悖也。)(本文篇五、三八五頁)

とあって、『孟子集注』公孫丑篇下の記述を一部引用するとともに、その後の自注で『孟子或問』の議論を引いて補足説明している。

以上は、本抄に見られる朱熹および朱子學關係の著作につき、その引用の仕方をおおまかに考察したものである。

引用された記述の多くは訓點を付けない漢文であり、漢文の引用は漢籍の原典とほぼ一致することから、桃源は『史記』講義の記録を整理する際に、引用文については原典を直接確認し引用したものと考えられる。また『論語』や『詩經』の場合、『四書大全』『五經大全』から引用する場合が多いが、それ以外に『四書或問』『朱子語類』『癸巳論語解』『論語正義』『四書通證』『四書輯釋』などを直接参照していたことがわかる。このほか、『儒林列傳』の「適齊聞韶三月不知肉味」條や『孝文本紀』の「已下服大紅十五日小紅十四日織七日釋服」條のように、漢文を引用したあと、桃源自身の見解を和文で付け加えることも多い。和文で記された部分は「アルソ」など口語的な表現があるので、講義の聞書と見てよい。

このように、桃源は、朱熹たちの著作を数多く閱讀し、そこから多くの記述を引用するばかりか、朱子學の學統に對しても相當な理解があったことがわかる。これは當時の五山禪林の漢學において、何を意味するのであるか。そもそも朱子學を含む新しい漢籍を將來した五山禪僧が、それを利用して古典を注釋するというのは特に不自然なことではなかったかもしれない。しかし、本抄の内容構成をふまえて、桃源の注釋方法と叢林の從來の注釋方法と比較すれば、本抄が特色あ

る著述であることが知られると思われる。

## 二 『史記抄』の内容構成

『史記』は本紀十二卷、表十卷、書八卷、世家三十卷、列傳七十卷、合計百三十卷から構成されているが、本抄が講抄したのは本紀十二卷と列傳七十卷の全部、および世家の「吳太伯世家」の八十三卷だけである。ただ「史記源流」「史記集解序」「補史記序」「史記索隱序」「史記正義序」「三皇本紀」など『史記』正文にはない内容も加えているので合計八十九卷となった。

今泉淑夫と大塚光信が指摘するように、この八十九卷はすべてが桃源の講義ではなく、桃源の『史記』講義・季玉聞書(桃季抄)、牧中梵祐の『史記』講義・桃源聞書(牧中講)、竺雲等連(一三八三〜一四七二)の『漢書』講義・桃源聞書(竺桃抄)の三部より構成されたものである。その具體的な構成は次の表のとおりである。

### 『史記抄』の内容構成

桃季抄	史記源流、周本紀(後半)、秦本紀、秦始皇本紀、項羽本紀、高祖本紀、呂后本紀、孝文本紀、孝景本紀、孝武本紀、扁鵲倉公列傳、儒林列傳、貨殖列傳、太史公自序
牧中講	史記集解序、補史記序、史記索隱序、史記正義序、三皇本紀、五帝本紀、夏本紀、殷本紀、周本紀(前半)、吳太伯世家、老子伯夷列傳、司馬相如列傳(扁鵲倉公列傳)と「司馬相如列傳」は除く
竺桃抄	司馬相如列傳(後半)、淮南衡山列傳、循吏列傳、汲鄭列傳

(今泉淑夫『桃源瑞仙年譜』一一九〜一二二頁より作成)

これによると本抄八十九卷の中で、牧中講は六十五卷と半卷二カ所、竺桃抄は三卷と半卷一ヶ所、桃季抄は十九卷と半卷一ヶ所である。そして本抄の中で朱子學との関連内容が見出されるのは「秦本紀」「秦始皇本紀」「項羽本紀」「高祖本紀」「孝文本紀」「孝武本紀」「吳太伯世家」「儒林列傳」「龜策列傳」「貨殖列傳」「太史公自序」の十一卷である。ということは、「吳太伯世家」以外はすべて桃季抄に含まれることになる。この「吳太伯世家」は牧中講より作成されたものであるが、その中の朱子學関連内容について少し検討してみたい。

まず「吳太伯世家」の注釋の中で漢籍から原文をそのまま引用する箇所が多いが、このような原文の引用は、實は牧中講の他の部分にはほとんど見られない。「吳太伯世家」における朱子學関連著作も、同じく漢文で引用されている。さらに注意すべきは「吳太伯世家」では「蕉子子按」「蕉子子力意ナラハ」など桃源自身の加筆部分があることである。

こうしたことから考えると、「吳太伯世家」における朱子學関連著述の引用は牧中講の他の部分と不調和であり、桃源によってあとで加筆された可能性がある。聞書の記録だけではなく、聞書を整理する際に補充が加えられたのではないかと考えられるのである。そもそも牧中講の他の部分を見ると、朱子學の引用は皆無であるから、講者牧中梵祐は朱子學についてはある程度知っていたであろうが、それを利用して『史記』の本文を注解する意識があったかどうかは疑問である。

たとえば桃季抄「貨殖列傳」の管仲に關する注釋では『論語集注』と『論語或問』から多くの関連記述を引用するが、牧中講「管晏列傳」にそのような記述は一切見られない。そのため、管仲を重視する桃源は「貨殖列傳」の中で、わざわざ管仲に關する記述を補充したも

のと思われる。「吳太伯世家」中の朱子學関連記述も、これと同じように桃源による補訂であったと考えられるのである。

さらに牧中講は朱子學を引用しないだけでなく、經書や史書の原文自體をあまり引用しない。桃源は「周本紀」(後半)の末尾で、周武王までの牧中の講義(前半)はわずかに「三十紙」で簡略なのに對し、桃源みずからが講じた成王以降は「六十餘紙」と詳細になっていると、それは經書・史書を多く加筆したからだとして、

史記本紀、牧中之講止周武而已矣。成王以下今抄之。……蓋聞講則書其所聞、而不聞則書其所不聞故也。夫書之始于堯舜、終于晉文秦穆、詩之起於文武、盡於襄頃、而國語自穆王至敬王、皆昔不言而今書之。況亦平王之末年而入春秋焉、威烈王之季世而入通鑑焉、劉道原之外紀焉、鄉者無取者。(本文篇一、二四一頁)

〔史記本紀、牧中の講は周武に止まるのみ。成王以下、今之を抄す。……蓋し講を聞けば則ち其の聞く所を書して、聞かざれば則ち其の間かざる所を書するが故なり。夫れ書の堯舜に始まり、晉文秦穆に終わり、詩の文武に起りて、襄頃に盡く。而して國語は穆王より敬王に至るも、皆な昔言わずして今之を書す。況や亦た平王之末年にして春秋に入り、威烈王之季世にして通鑑に入り、劉道原の外紀、郷(さき)には取る者無し。〕

といっている。牧中講の本紀ではもともと『尚書』『詩經』『春秋』『國語』『資治通鑑』『資治通鑑外紀』などを用いていなかったため、桃源がそれらをここで引用したというのである。

さて、上述のように、當時の日本では中國から朱子學を含む漢籍が大量に將來され、叢林において漢學の知識は必須のものとなっていた。朱子學など最新の知識を論ずる學僧も増え、一般には中世漢學の中心



は五山であるとされる。確かにそのとおりではあるが、叢林の學僧たちは漢學を學ぶとはいえ、必ずしも經史の學問を重視していたわけではない。

桃源が抄録する雲章一慶（一三八六〜一四六三）の講義録『百丈清規抄』に「四書五經ナントノ俗書ヲ讀ヲハ、世ニ落法師ノ様ニ云タカ、其後ハ史記漢書ヲ讀タカ、今ハ其ヲモトツテヲイテ、詩集文集ヲ本ニ習ソ」と述べている。「四書五經」などの「俗書」の學習はかつて批判されたが、その後「史記漢書」を讀むように變わり、さらに今ではもっぱら「詩集文集」を習うようになったという。この記述は講者雲章と抄録者桃源、どちらの意見か判明しかねるが、本抄「周本紀」の抄の末尾で、

凡言學者、六經三史爲體、諸子百家爲翼。是以見所未見之書、無不通者也。近世之學則異于此、大抵率逐末而棄本者、什八九矣。

蓋便于製作吟詠也。雖然每布一字置一辭、往々不免差誤、則可無慚色哉。是浮華無實之罪也。近來盧陵曾鼎曰、經似山林中花、史是園圃中花左傳以下、古文高者似欄檻中花退之類、次者、似盆盎中花歐之類、似瓶中花無根。蓋古人未發之名評矣。由是觀之、今之以詩文鳴者、不瓶花幾希矣。（本文篇一、二四一頁）

〔凡そ學を言う者は、六經三史を體と爲し、諸子百家を翼と爲す。是を以て未だ見ざる所の書を見るに、通ぜざる者無し。近世の學は則ち此に異なり、大抵率ね末を逐いて本を棄つる者、什に八九なり。蓋し製作吟詠に便なればなり。然りと雖も一字を布き一辭を置く毎に、往々差誤を免れざれば、則ち慚色無かるべけんや。是れ浮華無實の罪なり。近來、盧陵の曾鼎曰く、「經は山林中の花に似、史は是れ園圃中の花、（左傳以下）古文の高き者は欄檻中の花（退之の類）、次者は盆盎中の花に似（歐の

類）、下者は瓶中の花の根無きに似たり」と。蓋し古人未發の名評なり。是に由りて之を觀るに、今の詩文を以て鳴る者、瓶花ならざるは幾（ほとん）ど希（まれ）なり。〕

といつており、六經と『史記』『漢書』『後漢書』の三史こそ學問の根本であり、諸子百家がその羽翼をなすという。そのため當時の叢林學僧の間に存在する詩文重視の傾向を批判し、明の曾鼎（一三二二〜一三七八）の語を引用しつつ、それらは根のない「瓶花」にすぎないと斷じており、『百丈清規抄』と似たような見解となつている。

### 三 公家儒者と桃源瑞仙

さて、なぜ桃源は從來の叢林學風に反して佛學から離れ、經書や朱子學の書籍を積極的に利用して『史記』の本文を注釋したのであろうか。ここで當時の知識層に現れた新しい動きに注目したい。

中原康富の日記『康富記』應永二十五年七月四日條に、高倉淨居庵論語談議今日終者也。萬里小路已下公家人々三十人許也。僧達百三十八人。已上百六十人餘也。

という興味深い記事がある。應永二十五年（二四一八）は桃源の生まれる直前である。これによれば、淨居庵の「論語談議」に参加するために公家が三十人ほど、僧侶は百三十人以上集まつたという。

淨居庵は清原良賢（一三四八〜一四三二）の隱居所として清原家の本據に附屬して建てられており、この時期、良賢は經書談議や漢詩の詩會をたびたび催していた<sup>①</sup>。これらの談議や詩會の參加者の全貌ははっきりしないが、その後、東福寺の僧太極の日記『碧山日録』によると太極は淨居庵でしばしば清原業忠（一四〇九〜一四六七）らに面會したらしい。業忠は良賢の孫である。さらに太極が業忠から『論語』<sup>②</sup>『孟

子』『尙書』『左傳』を學んだこと<sup>19)</sup>、業忠が長祿三年(一四六〇)頃に『論語』『尙書』『左傳』および「諸典」の講義を開催したことなどが述べられている。

禪僧と清原家の知的交渉がいつから始まったのかは不明だが、京都五山制度の確立に伴って、公家が子を五山叢林で修行させ、出家させるといふ動きが現れている。そのような中で禪僧と一部の公家儒者との関係も緊密さを増したであろう。たとえば淨居庵主の鶴隱周紹は清原家の出身である。おそらく公家子弟の叢林進出をきっかけに、公家儒者と叢林禪僧の間に漢學を中心とする知的な交渉が本格的に展開したものである。

このようなこの知的交渉は決して一方的、受動的なものではなく、互いに知識を交流しあうことがあったようである。ここで瑞溪周鳳と清原業忠の交流に注目したい。

瑞溪周鳳(一三九二—一四七三)<sup>20)</sup>の日記『臥雲日件録尤拔』の康正二年(一四五六)三月十六日條に「外記來、爐間相迎。彼問佛教、我問儒教」の記録がある。「外記」とは業忠その人である。業忠は佛教について質問し、瑞溪は儒教について質問したという。また寛正七年(一四六六)二月三日條に「外記常忠來話次日、四書大全永樂年中所撰也、論語三省三臭等之三字、注云……」とあって、業忠(法名常忠)が來訪して『四書大全』および『論語』中の「三」の語につき語りあったという。これらの記事によると、業忠はしばしば瑞溪を訪ね、佛教や儒教の知識交換を行なうという友人關係にあった。

こうした叢林禪僧と公家儒者の知的交渉こそ、桃源瑞仙の經史學が形成された要因であったと考えられる。これに關して桃源は本抄の「太史公自序」の最後に「余之言、乃自疆北禪玉渚三大老及一條臺

閣清家環翠翁之言也(本文篇五、四四〇頁)」と述懐している。ここにいう自疆、北禪、玉渚、一條臺閣、清家環翠翁は、それぞれ竺雲等連、瑞溪周鳳、雲章一慶、一條兼良(一四〇二—一四八二)、清原業忠である。業忠と瑞溪についてはすでに觸れたが、雲章一慶と一條兼良は兄弟であるばかりか、いずれも『四書集注』と『詩集傳』に初めて和訓をつけた學僧岐陽方秀(一三三六—一四二四)の門下と考えられている<sup>21)</sup>。

岐陽の事績について、桂庵玄樹(一四二七—一五〇八)の『桂庵和尚家法倭點』に「普光院殿御代、渡唐船雖載新注來、叢林不事<sup>22)</sup>二書之學、故不辯<sup>23)</sup>新古之好惡、東福不二岐陽和尚、初講<sup>24)</sup>此書」と岐陽は初めて新注を講じたと述べる一節があるが、この主張が正確でないことは住吉朋彦が指摘している<sup>25)</sup>。

實際、宋學は泉涌寺開山の俊苒(一一六六—一二二七)が初めて日本に傳えたとされ、續いて宋からの來朝僧一山一寧(一二七四—一三二七)が日本に紹介することで叢林における宋學の受容はすでに始まっていた。例えば叢林の碩學虎關師鍊(一二七八—一三四六)や中巖圓月(一二〇〇—一三七五)は儒學を議論する際に孟子・荀子・楊雄・王通・韓愈の學統を重視するとともに、周敦頤・張載・程顥・程頤・朱熹の道學も視野に入れていた。また、五山叢林におけるもう一人の代表的學問僧の義堂周信(一二七四—一三二七)は『大學』をはじめ『四書』に通曉し、將軍足利義滿(二三三八—一四〇八)に對して新注と古注の相違や『四書』の學習法などを紹介したこともある。しかし、これらの五山僧はいずれも北宋の學僧明教大師契嵩(一〇〇七—一〇七二)を模範とし、主に佛儒一致を説くもので、儒學專修の學統を形成し、講義活動を組織するとまではいかなかった。特に義堂は儒學が佛學の補助に過ぎないとし、儒學を專修する僧人資中は「佛法外道」であると

強く非難していた。<sup>(23)</sup>このように、五山叢林ではいち早く宋學の受容が始まっていたが、儒典の學統の形成はもつと遅れる。その意味で、岐陽の『四書』講義というのは叢林における儒學專修の學統が確立し始めたことを意味するのであろう。

岐陽の門下雲章一慶は元代の禪院規式『敕修百丈清規』を講ずる際に、儒學、特に宋學の要素を多く取り入れていた。特に『敕修百丈清規』の「主持章」は、ほぼ『大學』をめぐる解説である。もちろん、雲章の儒學は佛學の補助手段として用いられているわけだが、『敕修百丈清規』講義に利用された『大學』の注釋と「性」説における講説の立て方は一條兼良の講義録『四書童子訓』と一致することが指摘されている。<sup>(24)</sup>これは雲章と兼良が同じ岐陽の學統を受け継ぐことによるものである。ちなみに、雲章の『敕修百丈清規』講義を組織し、その内容を筆録したのは桃源であった。桃源は『敕修百丈清規』講義から儒學、特に宋學の思想を學ぶとともに、さらに雲章を介して兼良の儒學を聞いたと考えられる。

瑞溪や雲章のような儒僧と違って、一條兼良と清原業忠は、いずれも儒典を治め、新注を積極的に導入しつつ經史の講抄活動に取り組んだ公家儒者であった。

業忠は明經家の學者として天皇や將軍のみならず上級武士や禪僧向けの經學講義も積極的に行なっている。<sup>(25)</sup>清原家の朱子學の受容については不明な點がまだ多いが、足利學校藏『禮記集說』に「至徳二年六月十一日、以二五條大外記家本一移點了。其本之奥書曰、永和元年五月二日以二此本一候二禁裏一御讀訖。清原良賢」という奥書がある。<sup>(26)</sup>これによれば業忠の祖父良賢は永和元年（一二七五）に後圓融院（一二三九〜一二九三）に『禮記集說』を進講していたことがわかる。また

良賢の講義録に『應長二十七年論語抄』という抄物が残っており、その中では朱子學の新注を大量に引用している。<sup>(27)</sup>これらのことから見て、良賢が新注を受容していたことは間違いない。また業忠は前述のように瑞溪周鳳と『四書大全』の情報交換するだけでなく、四書の講義をたびたび開催したという記録も残っている。<sup>(28)</sup>一方、五攝家的一条兼良は祖父經通（一二三八〜一四一八）と岐陽方秀の影響により經學、特に朱子學に關心を寄せていた。日本最初の『四書集注』講義録『四書童子訓』を著述するほか、『日本書紀』神代卷を注釋する際にも朱子學の知識を利用している。<sup>(29)</sup>

桃源は彼らから、具體的にどのような教えを受けたのであろうか。

芳賀幸四郎と和島芳男は『百衲襖』五の識語に、  
日本ノ大外記環翠老人清三位法名常忠ハ得講書三代第一等ノ名儒ナリ、前關白一條殿下二次テハ古今無雙ノ名儒也、余皆陪其講筵、親聽緒論矣。<sup>(30)</sup>

とあることから、桃源が業忠（常忠）から『易學啓蒙』の講義を受けたと推定している。ただし、『百衲襖』は『易學啓蒙』の抄物ではなく、『易經』の抄物であり、この部分の『百衲襖』は既に焼失したため、<sup>(31)</sup>現在、原文の確認はできない。さらに、ここには業忠以外に一條兼良（前關白一條殿下）の名前も學がつているが、彼らが『易學啓蒙』の講義を受けたかどうかは定かではない。ただし『不二遺稿』の記述によると兼良の師岐陽は『易學啓蒙』を學んだことがある。そうであれば桃源は兼良から『易學啓蒙』を受けた可能性があることになる。<sup>(32)</sup>

兼良や業忠の講義として本抄の中ではつきり確認できるのは『禮記』である。「孝文本紀」「巳下服大紅十五日小紅十四日織七日釋服」條に「蕉子子ハ始十卷ヲハ、一條大閣ノ講ヲ聞ク、末十卷ヲハ、外記

環翠翁ノ講ヲ聞タソ」とあつて、兼良と業忠から『禮記』を十卷ずつ受講したという。『禮記』の内容は二十巻にとどまらないし、講義の記録も残っていないため、いかなる講義内容だったのかは明らかにしない。ただ、前述のように業忠の祖父良賢は『禮記集說』を進講したことがあつた。また、田村航の調査によると、兼良は衛湜（二二四〜二二六四）の『禮記集說』を見ていた可能性がある。衛湜の『禮記集說』は『禮記』に関する諸注を集成し、その中に朱熹の『禮記』説も引用している。よつて、桃源は兼良や業忠の『禮記』講義を受けた際に、上述したような『家禮』の内容を聞いた可能性が考えられる。また、桃源は遅くとも長祿元年（二四五七）の頃には瑞溪門下となつてゐる。それは先に觸れた瑞溪と業忠が『四書大全』と『論語』の「三」の語につき語りあつた頃のことであり、桃源は瑞溪を通してその議論を聞いたかもしれない。また、『四書大全』と『五經大全』は永樂十三年（二四一五）中國で刊行された書物であり、業忠と瑞溪の對話から見ると、瑞溪は『四書大全』に關してはまだ十分詳しくなかつたようである。そうすると、本抄中で『五經大全』と『四書大全』の記述を多数引用するのは業忠からの影響が強いと考えられよう。

一方、兼良の場合、桃源は『禮記』以外に兼良から何を聴講したかは明言していないが、兼良の著述『四書童子訓』中には『大學章句』『大學或問』だけではなく、『四書輯釋』からの引用も見える。住吉朋彦はこれが兼良の朱子學に對する組織的理解を示すものと指摘している<sup>33</sup>。また、兼良は『江家次第』を談義する際にも、『四書章圖纂釋』を利用したらしい。これらのことからすれば、桃源の『四書輯釋』に關する知識は兼良から受けた可能性が考えられる。

このほか、兼良から『日本書紀』の講義を受けた可能性も注意され

る。桃源は『史記』『漢書』の抄物以外に、『日本書紀』の抄物も残しているからである。同抄の内容が吉田家の神道思想にもとづくことはすでに蔭木英雄が指摘している。それによれば、吉田兼俱（二四三五〜一五一二）の『日本書紀』講義を受けた前述の公家壬生雅久の影響とされるが、兼良の影響も考えなければならないであろう。

周知のように、一條家は實經（二二三三〜二二八四）と家經（二二四八〜二二九四）の代に卜部兼文から『日本書紀』の講義を受けるほか、卜部氏およびその嫡流吉田家と深く縁を結んだ。兼良の父經嗣（二三五八〜一四一八）は吉田兼熙（二三四八〜一四〇二）から『日本書紀』三十卷の祕説を傳授され、それをきっかけとして『日本書紀』が一條家の有職學の一部になつたのである。つまり、桃源の『日本書紀』抄物は壬生雅久の影響もあるが、吉田神道を有職學とする兼良からの影響を受けたのではないだろうか。

ここで注目したいのは康正年間（二四五五〜一四五七）、兼良が禁裏に『日本書紀』神代卷の講義を行ない、その講義の手控えノートをもとに『日本書紀纂疏』という注釋書を作成したことである。そして、兼良はこの『日本書紀纂疏』において本文を注釋する際、『周禮』『尙書』『史記』『中庸』『孝經』など經書だけでなく、『禮記集說』から程頤、張載、朱熹の鬼神論までも引用しているのである。このことは、經書や注釋書を利用して『史記』の本文を註釋する桃源の方法が、兼良から影響を受けていることを示唆するものではあるまいか。

以上のように、桃源が叢林の舊來のあり方を打破して、それとは異なる學風を持ち込んだ背景に、儒學をめぐる一部の禪僧と公家儒者との間の知的交渉があつたことがわかる。もちろん、桃源は單に受動的に公家儒者の教えを受け入れたわけではなく、公家儒者から受けた經

學の知識を活かしつつ、當時入手可能だった經書を可能な限り利用して詳細な『史記』注釋を作成したという點に桃源の特色が認められるであろう。

### おわりに

本稿では桃源瑞仙の『史記抄』の中で用いられる朱子學關連記述をめぐって考察を行なうとともに、叢林の學風の變化や禪僧と公家儒者の交渉について検討した。その意味するところは思ひのほか廣い範圍に及ぶように思われる。

第一に、桃源の『史記抄』の中には朱子學關連内容が大量に見いだされるといふ事實である。『四書集注』、『論語或問』、『孟子或問』、『書集傳』、陳澧の『禮記集說』、倪士毅『四書輯釋』、王元善『四書通考』、程復心『四書章句纂釋』、『五經大全』、『四書大全』、『資治通鑑綱目』、『詩集傳』、『家禮』、『易學啓蒙』、『朱子語類』などの書籍群であつて、室町中期における朱子學受容の實例として極めて興味深い。このうち『家禮』の引用は、おそらく日本における同書の最も早い引用例としても注意される。

第二に、桃源が朱子學を含む經史關連の書籍を多數利用して『史記』本文の記述を比較考察していることである。つまり、單に朱熹の注を用いた解釋ということにとどまらず、歴史を經學および朱子學的觀點から解釋するという傾向を帯びているのである。本抄では十分展開されていないが、正統論や大義名分論に觸れているのは、そのような經書と史書を兼學することからする歸結であつたろう。こうした史學は従來の叢林漢學とは異なる特色を持っている。

このことはまた、それまでの叢林漢學が佛學に依存し、詩文を重視

して經史の學問を輕視していたのとも當然違つてゐる。そのような學風を批判して著された『史記抄』は當時の叢林漢學が佛學から離脱し始めたことを示す一つの象徴となつてゐるわけである。

第三に、この叢林漢學界における學風の轉換は公家儒者と深い関わりがあつたと考えられる。室町時代においては京都五山制度の成立とともに、公家出身の禪僧も増えていく。この流れの中で禪僧と公家儒者の漢學をめぐる知的交渉もますます密接になるのであつて、桃源はその恩恵を受けた一人である。すなわち竺雲等連、瑞溪周鳳、雲章一慶、牧中梵祐といった禪僧のみならず、名高い公家儒者であり朱子學に造詣の深かつた清原業忠や一條兼良の漢學に關する講義も受けたのであり、こうした重層的な學問經歷こそ桃源がそれまでの叢林の學風を打破できた要因であらう。

こうした叢林と公家儒者との知的交渉は従來の研究でも指摘されてきたことであるが、朱子學の受容状況も含めてより詳細な調査、考察が求められるところである。

### 注

- (一) 國語學に關しては三々尻浩「漢文和讀史上ヨリ見タル室町時代ノ抄物ニ就テ」(『謄寫版本』『史記抄』付録、一九三七年)、湯澤幸吉郎『室町時代の言語研究』(風間書房、一九五五年)、大塚光信「史記抄の諸史記抄の本文―漢書抄との關係から」(『國語國文論集』一號、一九七〇年)、山田潔「史記抄における助動詞「ウ」「ウズ」の考察」(『國學院雜誌』七六卷(七)、一九七五年)、壽嶽章子「史記抄の文章」(『室町時代語の表現』、清文堂出版、一九八三年)、田籠博「中世語彙資料としての『史記抄』」(『島大國文』四十三號、二〇一五年)、坂水貴司「京都大學附屬

圖書館清家文庫藏『史記抄』清原宣賢書寫部分における漢字音の音形についで」(『論叢國語教育學』一四號、二〇一三年) 田中尙子「室町期における中國史書研究の背景―『史記抄』が繙く日本紀の世界―」(『日本文學』七十卷六號、二〇二二年) などがある。

(2) 文學に關しては、田中靖子「『太平記』における『史記』受容の側面―項羽の垓下歌を中心に―」(『學習院大學國語國文學會誌』五八號、二〇一五年)、山中延之「桃源瑞仙『史記抄』のことわざ「袴下辱(こはくのはじ)」について」(『アジア遊學』一一一、二〇一八年) など。

(3) 史學に關しては、大島利一「桃源瑞仙の史記抄を讀む」(『東方學報』京都・五號、一九三九年)、蔭木英雄「桃源瑞仙の史學―史記抄を中心に―」(『東洋文化』四號、一九七〇年)、田中尙子「『史記抄』における日本關連敘述―『漢書抄』第一冊との關わりから」(『室町の學問と知の繼承』勉誠出版、二〇一七年) がある。

(4) 醫學に關しては、田中尙子「『史記抄』「扁鵲倉公傳」にみる桃源瑞仙の志向性―室町期の學者たちと醫學・醫書」(『室町の學問と知の繼承』勉誠出版、二〇一七年) 参照。

(5) 足利衍述『鎌倉室町時代之儒教』(有明書房、一九七〇年)。

(6) 蔭木英雄「桃源瑞仙について」(『相愛大學研究論集』三卷、一九八七年)。

(7) 今泉淑夫『桃源瑞仙年譜』(春秋社、一九九三年)。

(8) ただし、朱熹は『左傳』には注していない。

(9) 『大日本史料』第八編二十九(東京大學出版會、一九七四年) 一四〇一七頁を参照。

(10) 柳田征司「抄物目錄稿(原典漢籍經史子類の部)」(『訓點語と訓點資料』七〇、一九八三・八)。

(11) 吾妻重二彙校『朱子家禮』宋本彙校(上海古籍出版社、二〇二〇

年)八九頁以下。

(12) 吾妻重二「近世儒教の祭祀儀禮と木主・位牌―朱熹の『家禮』の一展開」、吾妻重二・黃俊傑編『東アジア世界と儒教』(東方書店、二〇〇五年) 一九五頁。

(13) 佐野公治『四書學史の研究』(創文社、一九八八年) 二三三頁。

(14) 山中延之「『易』の抄物による日本語史研究」(京都大學博士論文、二〇一五年)。

(15) 注(7) 今泉淑夫『桃源瑞仙年譜』一一九〜一二二頁。

(16) 大塚光信編『續抄物資料集成八 百丈清規抄』(清文堂、一九八〇年) 二六七頁。

(17) 阿部隆一「室町以前邦人撰述論語孟子注釋書(上)」(『斯道文庫論集』二號、一九六三年) 三一〜九八頁。川本慎自『中世禪宗の儒學學習と科學知識』(思文閣出版、二〇二二年)、上野太祐「世阿彌と『毛詩』をつなぐもの―『音曲口傳』第六條の「正しき」をめぐる―」(『書物・出版と社會變容』一二號、二〇一六年) 八三〜一〇二頁。

(18) 『碧山日錄』寛正二年四月二十六日條ほか。

(19) 『碧山日錄』長祿三年二月十三日條、「過春公之宅前、外史清忠公相會也、予素學論語・孟子・尙書・毛詩及左傳於此人也。」

(20) 『碧山日錄』長祿三年二月二十三日條、「而外史業公、積精深思、通達其旨、頃大開講肆、議說論語・尙書・左氏傳及諸典、其辨如翻波、天下學者皆師之。」

(21) 和島芳男『日本宋學史の研究』(吉川弘文館、一九八八年) 一一二〜一一三頁。注(5) 足利衍述『鎌倉室町時代之儒教』五四三〜五五〇頁。

(22) 住吉朋彦「不二和尚岐陽方秀の事績―儒道二教に於ける―」(『書陵部紀要』四七、一九九六年三月)。

(23) 注(17) 川本慎自『中世禪宗の儒學學習と科學知識』九三〜九五頁。

- (24) 住吉朋彦『四書童子訓』の經學とその淵源」(『中世文學』三九、一九九四年六月)
- (25) 注(5) 足利衍述『鎌倉室町時代之儒教』四六六～四七〇頁。
- (26) 和島芳男「清家の點本とその家學上」(『神戸女學院大學論集』第九卷(三)、一九六三年)。
- (27) 吳美寧氏の調査によると、『應永二十七年論語抄』の中に百三十一箇所(六四%)に古注、十七箇所(七%)に新注、五十四箇所(二二%)に古注・新注の兩方を引用している。吳美寧『日本における論語の訓讀史の研究・中國側注釋書との關連に注目して』(北海道大學博士論文、二〇〇一年)を參見。
- (28) 『康富記』嘉吉三年六月十二條。『建内記』文安四年三月六日條。
- (29) 注(5) 足利衍述『鎌倉室町時代之儒教』五四三～五五〇頁。注(26) 和島芳男『日本宋學史の研究』二〇七～二二二頁。
- (30) この識語は注(9)『大日本史料 第八編之二十九』三七頁に收録。
- (31) 東京帝國大學所藏の『百衲襖』原本は關東大震災の時焼失した。注(7) 今泉淑夫『桃源瑞仙年譜』八一頁。
- (32) 注(22) 住吉朋彦「不二和尚岐陽方秀の事績―儒道二教に於ける―」。
- (33) 今泉淑夫は桃源の瑞溪入門時期について、文安二年(二四四五)と長祿元年(一四五七)の二つの可能性があると推定している。注(7) 今泉淑夫『桃源瑞仙年譜』三八～四〇頁參照。
- (34) 注(24) 住吉朋彦『四書童子訓』の經學とその淵源」。
- (35) 注(6) 蔭木英雄「桃源瑞仙について」一三六～一二五頁。
- (36) 近藤喜博「日本書紀纂疏の成立」(『ビブリア天理圖書館報』九、一九五七年)七～一〇頁。
- (37) 住吉朋彦「日本書紀纂疏―宋學受容の一面―」(『國文學解釋と鑑賞』六四(三)、一九九九年)六七～七四頁。